

北海道文教大学 外国語学部 国際言語学科

2011（H23）年度

点検・評価書

2011（H23）年12月27日

4 教育内容・方法・成果

◎ 目標・方針

「教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針」

(1) 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか

本学科の教育課程は、インターネットその他の技術革新に伴う経済活動の急速な変化により、世界のあらゆる地域がグローバル化する時代に突入したことに伴い、この社会変化に対応できる人材を育てるために作られた。本学科の教育課程は、大学設置基準第19条第1項を踏まえ、海外は勿論、国内にも増えつつある「多言語社会・多文化社会に対応できる」人材を育てるために、「言語教育だけでなく」、「国際的な感覚と高度な語学力を備え、異文化に対する正しい理解と協調の精神を持ち、国際社会の中で主体的に行動できる総合的な判断力」を兼ね備えた人材を養成することを目的に作られ、運営されている。

この目的を美しい謳い文句だけで終わらないために、国際言語学科の特徴として、一つの大きな工夫を組み込んでいる。それは、最初の1年目を「自分が本当に学びたい言語は何か」という問いに学生自身が真剣に向き合う年とし、その問いに確信をもって答えさせることである。また、この答えを見つけるための1年を置くことによって、その後の3年間、自律的学習姿勢で、挫折せず、継続して言語学習に取り組み続けるための動機付けを与え、本当に仕事で役に立つ言語能力を身につけさせることである。このことは、学生募集時のさまざまな印刷物、入学後に配布する『学生便覧』等の資料などに明示し、学科オリエンテーションでも説明している。

(2) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか

本学科では、新学科として開始した平成22年度から、教育課程の編成や実施方針を新年度の開始時に当該年度の『学生便覧』に明示し、特に、旧3学科との共通点や違いが明確になり、旧学科の学生には「何かがなくなってしまった」という喪失感やそれに起因する混乱がないように、また、新学科の学生には、本学部が新学科体制に刷新されたことで、さらに一層の質的改善がなされたことが十分に伝わるように配慮をしてきた。文字にして配布するだけでは伝わらない部分については、オリエンテーション時で詳しく説明すると同時に、各教員が、学生アドバイザー(旧3学科の学生に適用する呼称)又は学生担任(国際言語学科の学生に適用する呼称)として担当の学生に周知徹底させている。

(3) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学の構成員(教職員及び学生等)に周知され、社会に公表されているか

本学では、学科に所属する学生が到達すべき教育目標と、その目標を達成し、学位を取得するために知るべき諸事項を学生生活の全般にわたって説明するための手引と

して『学生便覧』を配布している。その『学生便覧』を用いて、学科の学生・教員が全員出席するオリエンテーションで、学科の基本的な教育目標とその達成までに必要な諸事項を詳細にわたって説明し、学生の間にも、教員の間にも間違っただけではないように配慮している。さらに、教育目標の実現にあたって学生の単位履修とそのため
の指導において障害が生じないように、4年間の学習の進捗状況が一目で把握できる「履修単位チェック表」を学科独自に作成し、その記入を学生に義務付け、各年度の前期と後期の2回、担任教員に提出し、担任はそれをチェックするようにしている。履修登録がウェブ上でできるようになり、ウェブ上の履修記録に教員がアクセスできるようになって、学生の学修進捗状況の把握自体は容易になりつつあるが、その代償として、学生と教員とが対面し、ことばによるコミュニケーションを行ないながら決めていくという過程が減少しているため、学生が自分の学修過程を本当に理解しているかどうかまでは確信が持てない。そのためにも、この「チェック表」に記入し、それを担任に見せることを制度化することによって、学生が自分自身の手で自分の学修状況を文字化し、自分の学びについてより深く理解できるようになると同時に、教員も学習者の進歩をつぶさに見ることができる。

社会に対する公表の方法としては、インターネット上の大学のホームページに、高校生やその保護者を念頭に置いて、一般的な読者向けの、わかりやすいことばと表現方法で本学科の教育目標やそのための教育課程の詳細を公表している。また、学科のメールアドレスも設置しており、質問があれば、教員が直接答えることができるような体制を整えている。

- (4) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか

教育課程の編成や実施の方針が適切かどうかは、(1) 学生にアンケートを実施し、直接聴くこと、(2) 学科会議などで適宜問題点を検討していくこと、(3) 用意された授業科目の履修登録や合格の状況といった客観データを確認すること、(4) 休学者や退学者の数、さらには、(5) 学生募集の状況や高校の進路指導の担当者などから得られる情報などによって、直接的、間接的に検証していくことができる。本学科では、上記の(1)～(5)のすべてにおいて随時検討、検証を行っている。

1 現状の説明

「教育課程・教育内容」

- (1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか

教育課程の編成・実施方針に基づき、現段階では授業科目を適切に開設しているが、実際に受け入れた学生の学修状況を見ながら、必要に応じて、随時教育課程の

編成・実施について微調整を行っていかねばならない。その調整は、具体的には、毎年次年度の授業計画における開講科目やクラス数及び担当教員配置の変更や履修規則の運用方法の改善といった事項の中で行っている。この調整過程は、学科教務委員の提案から始まって、学科長との調整会議、学科内での審議を経て、教務委員会、教授会等を経て、その妥当性を検討する体制が整っている。

- (2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、学士課程に相応しい教育内容を提供しているか
- 専門学校と大学との差異化を図るべく、単に語学ができるだけでなく、幅広い教養に裏づけられた社会人基礎力を目指すために、できる限り多様で、学生が関心を持ちやすく、なおかつ、専門の勉強への橋渡しとなるような教養科目を開講している。本学は、附属の高校を持ち、そこからの入学者を受入れていることから、本学での教育課程の長所・短所について、附属高校からのフィードバックが得られるようになっている。また、本学部には大学院も設置されており、学士課程で教育に携わる教員が大学院での教育にもかかわっている。そのため、本学部卒業者の実情をつぶさに観察することによって、大学院課程で必要とされる資質の観点から見た、本学部の学士課程の長所・短所もフィードバックされるようになっている。

「教育方法」

- (1) 教育方法および学習指導は適切か

本学のモットーである《実学重視の教育》を謳い文句で終わらせることなく、実際に具体化し、確実に実現していくための努力の一環として、全科目において、「(学習者は) ~することができるようになる」という各学習項目の積み上げによる応用力養成志向のシラバスを作成するよう教員への指導が徹底されている。毎回の授業の内容ですら、ただ知識として教えるだけでなく、それを聞いて理解することによって学生は何ができるようになるのか、という観点から記述するよう要求されており、漏れのないように、学科長が書かれたシラバスを全てチェックするようになっている。指導を実現するための評価の方法も、ウェブ上に公開されているシラバスを通して、全教職員に公開されている。

語学教育を中心に展開する本学科の教育・指導上の留意点は数である。少人数による語学教育が本学科の教育指導の根幹をなすが、それを保障するために最大限の努力がなされなければならない。その点では、基礎語学クラスは、国際言語学科開設の年から、履修登録者数の増減に常に目を配り、開講クラス数を最大限にして、語学教育の質的維持を図っている。一方、一般教養の科目においては、学生の関心を喚起できるような科目を設置しているので、いきおい、履修者が増え、大人数のクラスになっている。それでも、100名を超える教養科目は、各科目担当教員がきめこまやかな履修指導できるよう複数クラスに分ける努力をしている。

(2) シラバスに基づいて授業が展開されているか

シラバス通りに授業が行われているかどうかを客観的に検証する方法として、本学科では (a) 学生評価アンケートの実施と点検、(b) 教員による授業の相互参観と、参観教員と被参観教員による報告書の提出、(c) 上記(a)及び(b)からのデータに基づく、学科長によるシラバスの査読とピアレビューに基づいた授業改善のための教員間の意見交換、という3つの手段を採用している。これによって、シラバスが目標達成志向の書き方をされているか、また、それが学生に分かりやすく書かれているか、それを学生が読み、認識したうえで教員の授業評価を行っているか、そして、アンケートや他の教員からのフィードバックを各教員が確かに次年度の授業改善へと生かしているかをチェックできるようになっている。『シラバス』に記載された通りの授業が行われているかどうかに関する客観的なデータは、以前と比べて格段に増えたが、それを授業改善につなげるために、演習型授業でも講義型授業でも共有できるピアレビューの活用が課題であろう。

(3) 成績評価と単位認定は適切に行われているか

本学科における単位認定は、教員による対面授業による成績評価と、学科の教育課程外における学生の自律的・自主的学習によるさまざまな学習業績の認定評価の二つからなる。前者は自明の成績評価を指しているが、後者の評価は、国際言語学科の「総合言語実践」、「国際言語実践」、「資格・認定」という科目を配置して、申請に応じて学科として認定を行っている。適切に行われているかどうかについては、(a) 単位に対する学生の「疑義申し立て」の数、(b) 各科目毎の AA~D の分布、(c) 特定学生について類似科目間 AA~D の分布、の3種類のデータを見ることによって観測することができる。(a) については、2011年度前期については、単純な入力ミスに原因するもの1件を除いて、不適切な評価によるものは皆無であった。また、(b) 各科目毎の AA~D の分布がどうなっているか、特に AA と D の評価に極端な偏りがないか、を見ることによっても確認している。教務課から提示されたデータによれば、そのような異常な偏りの見られる科目はほとんど皆無に等しい。(b) や (c) の情報は、今年度から導入した全学データ管理システム (Universal Passport) によって、教務課 ((b) と (c) を把握) や担任 ((c) のみ把握) が閲覧しやすくなり、各教員が自分の教えている学生の評価と類似科目を担当する他の教員による学生評価との齟齬についてこれまで以上にきめこまやかな注意が払えるようになったことである。実際に、この (c) の方法で、不適切な評価の可能性が指摘されたこともあり、これは、(b) のデータともびったり呼応していた。その問題自体は今後一層調査の必要があるが、そのような問題が精査できる手段を学科として持つに至ったことは大いに評価すべきだと考える。

(4) 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結び付けているか

全学で活用されている GPA (Grade Point Average) 評価を活用して、学科の全体的な教育成果についての検証を行っているという点は、他の学部学科と共通であ

るが、外国学部国際言語学科として独自に行っている点検方法を以下に述べる。

英語教育については、毎年1, 2年生に英語プレースメント・テストを受験させ、各年度の学生達の語学力を客観的に測定できるように努めている。また、来年度からは、人間科学部理学療法学科と作業療法学科の2学科約130名の学生も、教養英語科目を学科習熟度別クラス編成で学ぶために同じテストを受けさせることになり、本学科の学生の語学力の現状や伸び、また、その伸びの要因と考えられる本学科の英語教育の効果を、他学科の学生との比較を通して、より客観的に測れるようになる。

さらに、学内で実施している「英検」や「TOEIC IP」などを通して学科として直接把握できる情報だけではなく、学生が学外で学生がどのような語学能力テストや資格試験を受験してきたか、また、その結果はどうだったかといった情報についても、毎年のオリエンテーションでアンケートを行い、できるだけ学生の知識や技能の成長を追うよう努力している。

また、測定・追跡ということだけではなく、「資格・検定」という認定科目を設定し、学外での努力を就職課と連携して評価している。上でも触れたが、「英検」では公式会場として、「TOEIC IP」は特別団体受験会場として、定期的に本学キャンパスで試験を実施し、日常的に学生達に受験を呼びかけている。語学能力試験については、英語だけではなく、中国語や日本語でも「中国語検定」や「漢字能力検定」「日本語力検定」の受験を奨励し、学生、教員が日頃の学習と教育の成果を常に意識して、授業や授業外での学修に臨めるよう努力している。

2008年～2009年度にかけては、「英検2級」とそれに相当するTOEICの得点を客観的な「外部基準」として卒業要件に加えてきた。しかし、そうするだけでは、その客観的データを学生に対する否定的な評価に使うことになるだけで、本学科の教育そのものの問題点を改善し、学生の学修を助けるところにまでには至っていなかった。今後は、英検やTOEICの受験を義務付け、その結果を教育の資質向上に恒常的につなげていけるよう一層の工夫が必要であると考えている。

さらに、留学生も含めて、全ての学習の根幹にある日本語の能力を充実させるために、1年次前期・後期に「基礎ゼミ」のI及びIIを配置して、少人数による日本語表現能力や大学での学修・調査に必要な基本技能の習得を助けているが、ここでも、旧学科の「基礎ゼミ」授業の反省を踏まえ、指導内容の統一性と学習成果の確認を可能にするために共通テストを行うことになった。担当者以外の教員も問題作成や採点にあたるなどの努力を通して、本学科の学生の進歩を全教員が学科として見守り、支援していくという体制が整いつつある。

「成 果」

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか

旧中国語コミュニケーション学科では、2009年以前の数年間にわたり、連続して定員割れが続いていたため、中国語と関係科目の担当教員は、この状況を打破す

るために並々ならぬ努力を払い、指導方法を改善し、短期間で大きな成果が上がる指導を工夫し、学習目標や達成された成果を学生と共有しながら、「やれば絶対に面白いと感じられる」中国語プログラムの確立に全身全霊を注いできた。その努力が今豊かに実を結んでいる。国際言語学科では、1年目を、自分が本当に学びたい言語が何語なのかを見きわめる年として位置づけ、それ以後の3年間を決定する重要な期間であると認識している。その重要な1年目に、中国語に関心を持ち、国際言語学科の新設時には予想していなかった数の学生が中国語を主言語として履修するようになってきている。1年目の中国語は1クラス開講の予定だったが、来年度に向けての授業計画では3クラス編成となっている。

さらに、国際言語学科では、複数言語の習得を目指すよう学生を励ましながらか各言語を指導している。その結果、国際言語学科になってからはじめて送り出す中国への留学者の中には、英語を主言語として学びたいという学生も2割ほど含まれている。旧3学科体制のときには決して見られなかった現象で、これは、まさに我々の指導と励ましの成果であるといえる。

上記の事象は、中国語プログラムの秀逸性を示唆してはいても、英語プログラムの問題を直接示唆するものではない。実際、英語でも、2年生で英検の準1級を取得する学生が現れ出している。これも、旧英米語コミュニケーション学科においては見られなかった現象である。旧3学科体制から新学科に移行して以降2年間の成果については、2012年4月のオリエンテーション時に行うテスト結果を旧学科における学生の英語力の伸び等と比較して見ないと断定的なことは言えないが、時間割上の配慮からはじまって、あらゆる面で、複数言語を本気で学べるよう保障した国際言語学科の教育課程が学生のやる気を鼓舞して、いままでになかった学習成果を生み出しているということは十分に考えられる。今後も様々な観点からの検証が必要である。

(2) 学位授与（卒業認定）は適切に行われているか

国際言語学科は、開設2年目にあたり、卒業認定を行なっていないが、外国語学部の旧学科においては、学生の成績情報に基づいて、学科会議、教務委員会、教授会を経て毎年適切に行なわれていた。ただ、卒業要件を厳密に満たしていない学生に対する直前の情状酌量措置が全面的に撤廃され、履修指導の徹底と卒業要件の厳密な遵守がすでに旧学科時代より慣習化しており、今後国際言語学科の学生が卒業時を迎えるにあたって、全く問題ないものと考えられる。

2 点検・評価

① 成果が上がっている事項

英語に関しては、2年次の終了までには、必ず1回英検またはTOEIC（公開又はIPテスト）を受験するよう指導している。前述の通り、科目の一部として取り組ませているeラーニング等で頑張った2年生の学生が11月の時点で準1級を取得するという

これまでになかった成果を上げた。これに続く合格者が出てくることが期待される。

中国語に関しても、現在中国語を主言語とするかなりの学生が留学中で、検定試験のスコアとして成果を示すことはできないが、これから花開く成果を、今年度各種中国語コンテストで上げられた成果から類推することは可能である。まず、平成23年5月21日（土）札幌大学で開催された「世界大学生スピーチコンテスト」では、本学部の4年生が準優勝。平成23年10月23日（日）かでの2・7で行なわれた「2011年度全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会」では、本学部の3年生3名が、暗唱の部で優勝、朗読の部で2位・3位に入賞、4年生が弁論の部で優勝・最優秀賞を獲得している。さらに、国際言語学科の2年生が、数少ない「中国政府奨学金国費留学生」に選ばれ、平成23年9月から1年間中国に留学している。

② 改善すべき事項

中国語を主言語として選ぶ学生の数が予想以上に多くなってきたということはきわめて喜ばしいことであるが、逆に言えば、英語プログラムが、この中国語に対する学生の関心を上回るような魅力ある授業を展開する余地ができてきたということである。それは、中国語科目履修者の増加と、英語科目履修者の減少という事態に端的に現れている。初習言語の中国語は、はじめから音声指導に重点を置き、耳と口を鍛え、文字は学生の親しみのある表意文字の漢字がベースなので、6年間やってきた英語と比べ、同じ時間を費やしても、自分で体感できる“伸び”が違う。「何かができるようになる喜び」が学修の動機付けの基礎にある。とすれば、中国語を初習で学ぶことから得られる喜びをさらに上回る学習達成感を本学科の英語プログラムが提供し、英語を専門に学びたいと思って入学してくる学習者が、英語学習の面白さを実感できるよう、初期の志を4年間維持できる工夫をしなければいけない。

3 将来に向けた発展方策

① 効果が上がっている事項

本学部では、日本語を「外国語」として扱っているが、本学部学生の大多数を占める日本人学生にとって本当の意味での外国語である英語と中国語を本気で両方同時に学んでいる学生はまだ数名に過ぎない。しかし、そのような学生が存在すること自体は素晴らしいことである。これらの学生たちが、両言語とも本当に仕事で役に立つレベルにまで能力を向上させることができるよう支援するのがこれからの大きな課題になる。

② 改善すべき事項（H24年度の目標）

本学科は、語学力を仕事で使えるようになるためには、自分が何をやりたいのか、大学を出てからの自分の生き方をしっかりと意識して、そこで必要だからこの言語を学ぶという前向きな意識を持つことや、実際に<外>に飛び出て、海外研修はもちろん、国内での様々なインターンシップやボランティア活動を経験し、そこで、行動することを通して体験的に言語能力の必要や重要性を学び、それによって言語習得の難しさを克服して、言語の知識や技能をさらに深めようという意思を持つことが重要である。

学生が複数言語を履修できるように科目の時間割配置などには細心の注意を払っているが、上述したような、〈外〉での活動と自立的・継続的な語学学修との連携を確立する工夫がまだまだ不十分である。特に、語学力向上の最大の方法の一つである留学と国外でのインターンシップとのカリキュラム上の連携がとれていないために、2年次に中国に留学した学生は3年次のインターンシップに参加することが困難な状態になっている。このような状態を改善するための工夫が早急に求められている。

4 根拠資料

- 資料－1 『北海道文教大学外国語学部 2011 学生便覧』
- 資料－2 『北海道文教大学外国語学部 2011 シラバス』
- 資料－3 「北海道文教大学・北海道文教大学大学院 学生による授業評価用紙」
- 資料－4 「履修単位チェック表」

国際言語学科 自己点検評価実施委員

役名	氏 名		
委員長	教授	岡本 佐智子	学科長
委員	教授	久野 寛之	大学評価委員会委員